

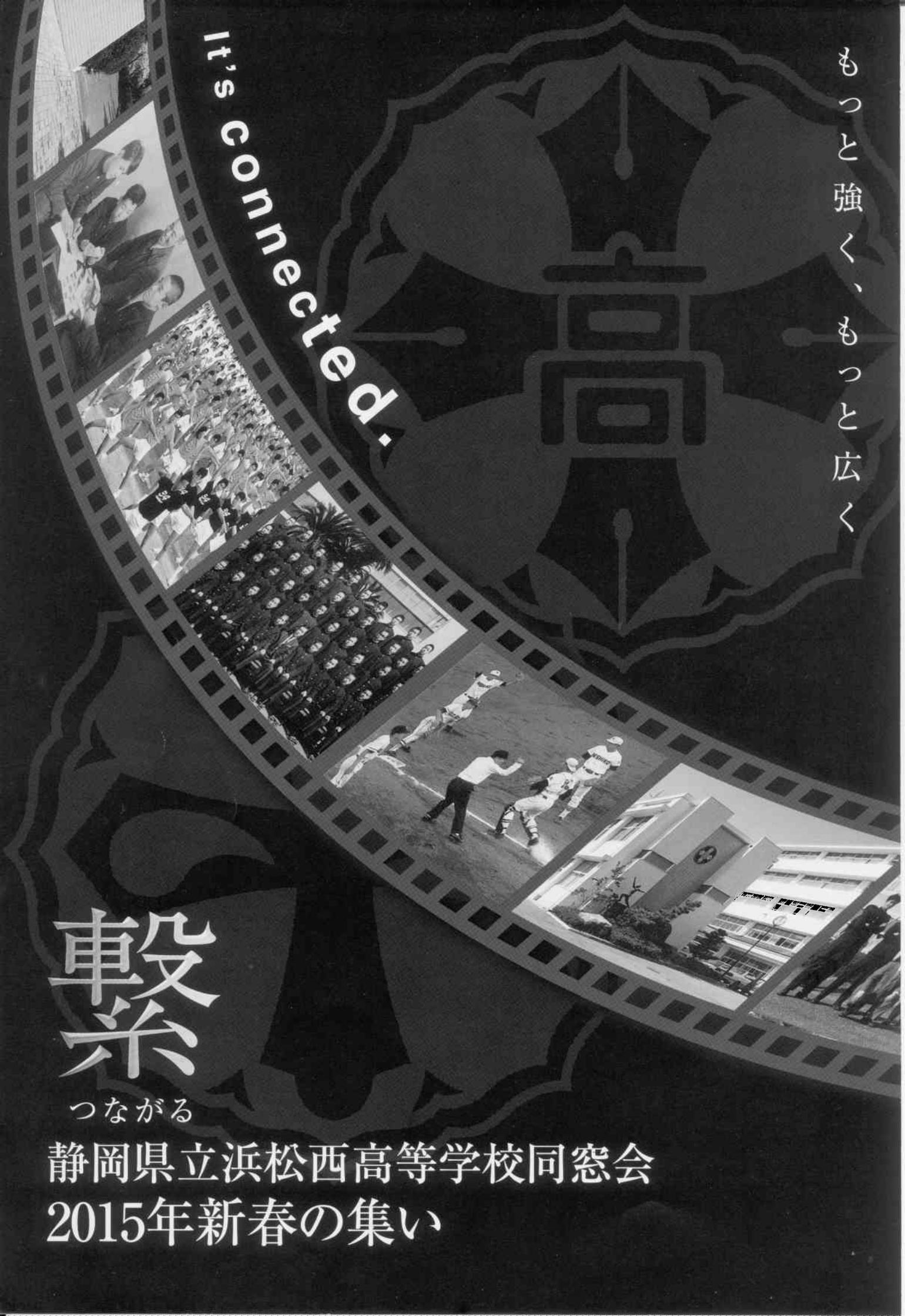
もっと強く、もっと広く

It's connected.

繋糸

つながる

静岡県立浜松西高等学校同窓会
2015年新春の集い



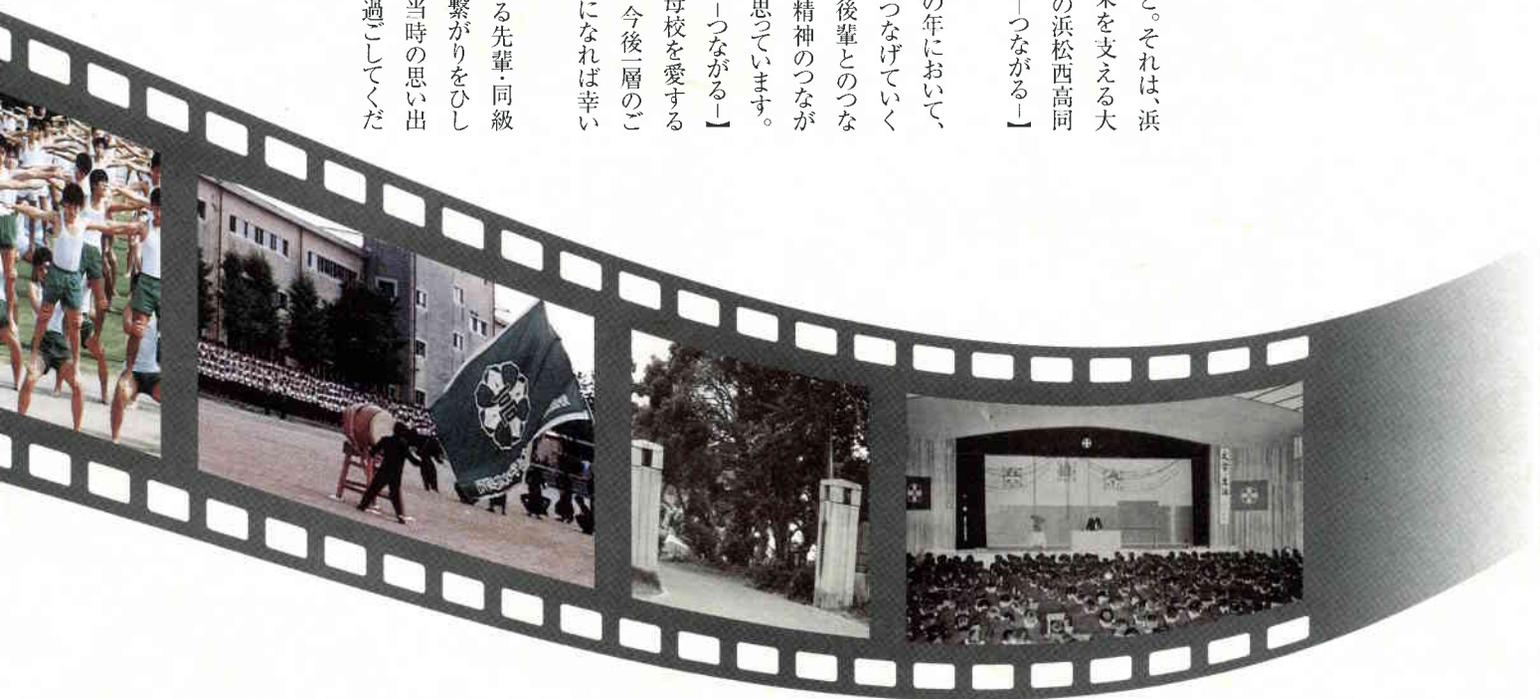
繋

つながる

西高同窓生が繋がること。それは、浜松の、日本の、世界の未来を支える大きな力になります。今年の浜松西高同窓会「新春の集い」は「繋―つながる―」がメインテーマです。

90周年を迎えた区切りの年において、母校への悠久なる想いをつなげていくとともに、先輩・同級生・後輩とのつながり、西高が持つ伝統的精神のつながりを大切にしていきたいと思っています。また、新しい年を迎え「繋―つながる―」を強く意識することで、母校を愛する気持ちをより隆起させ、今後一層のご活躍ご発展へのきっかけになれば幸いです。

本日はぜひ、無限に広がる先輩・同級生・後輩、または恩師との繋がりをひしひしと感じながら、在学当時の思い出を語り合い、素敵な一日を過ごしてください。



式次第

2015年1月2日(木)
会場：グラントホテル浜松 鳳の間

受付開始

【第1部】

14:00 天野先輩入場

15:00 開会宣言

浜松市長挨拶

天野先輩挨拶

ノーベル賞受賞講演会

(聞き手：鬼頭里枝(高52回卒))

【第2部】

校歌斉唱

来賓紹介

来賓祝辞

叙勲者表彰

還暦者ご紹介

還暦代表挨拶

鏡開き

乾杯

祝宴

ちんどん屋(浜松花蝶ちゃん)

新春大抽選会

代表幹事挨拶

次年度幹事挨拶

応援歌斉唱

閉会の辞

記念撮影

【司会】安藤記子

※都合により内容・進行順が変更になる場合があります。

CONTENTS

目次

01 式次第

02 校歌・応援歌・目次

03 ご挨拶
静岡県立浜松西高等学校 御室健一郎 同窓会会長
静岡県立浜松西高等学校 伊藤孝 後援会長
静岡県立浜松西高等学校 木村功 校長
静岡県立浜松西高等学校 2015年新春の集い代表幹事 村松貴通

05 天野さんノーベル物理学賞 受賞おめでとう

07 学校創立90周年 / 木村功校長の思い
中高一貫から紡ぎ出す、 西山台の魂

09 我々はどこから来て、どこへ行くのか
過去・現在・未来
卒業生は語る
遠州鉄道(株) 齊藤薫 (高23回卒) 取締役社長

11 輝くヴィーナス
野崎舞夏星 (高等部3年)
中村宝子 (高59回卒)

15 甦る 繋がりの記憶
～Tsunagaru座談会～

19 47回卒のプロフェッショナル
輝きを未来へつなぐ

23 WE TOGETHER OB OG
西高の思い出
西高探検

25 集え・西高 部活OB・OG会募集

26 祝還暦

29 高47回卒STAFF

30 協賛企業索引
広告

校歌

作詞 内野 徳治
作曲 泉 善三郎

一、銀くもりなき大洋や
おおなだ

東天耀ふ芙蓉峰
ふようほう

天与普き西山に
てんよあまね

聳ゆる麓 厳しく
そび いらか いかめ

こもる力の偉なるかな

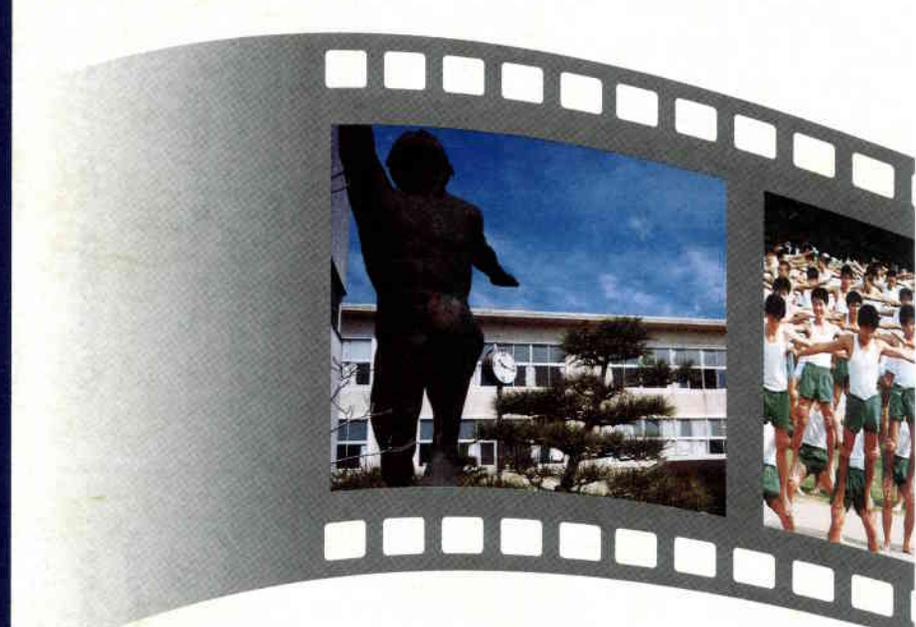
二、真澄める空に讃歌の
ほぎうた

声朗らかに打ち揚げて

清き尊き若き日の

誇りゆたけく睦みゆく
むつ

心の光遠きかな



応援歌

一、くろがねの男の子の腕
かいな

揮うべき時は来たりぬ
ふる

虹に似た我等が意気を
に

示すべき時は来たりぬ

ハイザー西高 ハイザー西高
フレアーオーオー

二、いでやいで打ちてつくして
いたた

戴かん勝利の冠
かむり

いでやいで追い斥けて
しりぞ

握らんか覇権の剣
はけん

ハイザー西高 ハイザー西高
フレアーオーオー





静岡県立浜松西高等学校
同窓会会長

御室健一郎

(浜松信用金庫 理事長)

明けましておめでとうございます。

皆様におかれましては、つつがなく新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。本年もご来賓の皆様、同窓の皆様が多数ご出席のもと、「新春の集い」が盛大に開催されますこと、厚くお礼申し上げます。

昨年10月、本同窓会にとりまして、実に嬉しいビッグニュースが飛び込んできました。すでに皆様もご存知のことと思いますが、青色LEDの発明と実用化への功績により、3名の日本人研究者がノーベル物理学賞を受賞され、その受賞者の1人が本同窓の天野浩氏ということになります。

ここに、天野氏の受賞を心よりお祝い申し上げますとともに、母校の名譽として、同窓会一同、その誇りを胸に留めたいと存じます。

昨年は、関東甲信地区の豪雪被害、広島での大規模土砂災害、御嶽山の噴火など、自然の脅威をあらためて実感させられるとともに、 Dengue熱感染者の多数発生というニュースにも驚かされました。なかでも、本来、熱帯でしか見られないはずの Dengue熱感染症が国内で広がるという事態に対しては、近年の局地的な集中豪雨の頻繁な発生と合わせ、地球温暖化が、徐々に、しかも確実に進行しているのではないかと漠然とした不安を強くいたしました。

そうした中、天野氏の研究成果が実用化された二例であるLED照明は、従来の白熱灯に対して6分の1の消費電力で済むことから、省エネ効果が非常に大きく、ひいては地球温暖化対策にもつながっているということで、天野氏の功績の素晴らしさをあらためて認識したところです。

今年の干支は「未(ひつじ)」です。羊はおとなしく従順な性格で、群れをなして行動する動物であることから、家族の安泰と平和の象徴とされています。

今後、ノーベル賞受賞者が母校から続々と誕生をというのは欲張りすぎですが、ぜひとも、わが母校から羊が群れをなすように数多くの有為な人材が育ち、世界の平和と繁栄に貢献して頂くことを願ひまして、新年のごあいさついたします。



静岡県立浜松西高等学校
後援会長

伊藤 孝

新年あけましておめでとうございます。

「新春の集い」が本年も盛大に開催され、同窓生の皆様一堂に会して、交流と絆を深められることを心からお慶び申し上げます。

昨年は、本校卒業生の天野浩さんがノーベル物理学賞を受賞され、私も同窓の一人として、大変勇気づけられました。在校生にとっても今後への大きな励みになったものと確信しております。

天野さんのこれまでのコメントを拝見しますと、人との絆や繋がりがいかに大切であるかを改めて認識しました。

この「新春の集い」での繋がりが、同窓生の皆様のさらなる前進への一助となる事を期待して止みません。

この西山台の良き伝統が末永く引き継がれていくことを心から祈念するとともに、今後も引き続き、浜松西高後援会へのご指導、ご声援をお願い申し上げます。年頭のご挨拶とさせていただきます。





静岡県立浜松西高等学校
校長
木村 功

新年あけましておめでとうございます。

同窓生の皆様には、日ごろより本校の教育活動に深いご理解と多大なご支援を賜り厚くお礼申し上げますとともに、恒例の「新春の集い」が今年もこのように盛大に開催され、交流と絆を深められますことを心よりお慶び申し上げます。

さて本年度、おかげさまで、本校は学校創立90周年を迎えました。今回は改まった式典等は実施を見合わせ、校内行事として記念講演会を行いました。講師にはテレビや新聞等でもおなじみのジャーナリスト、池上彰氏をお迎えし、「中高生に送る将来設計の道しるべ」という演題でご講演をいただきました。この講演が、これから先、自分自身の強い意志の力で未来への扉を開き、社会への貢献につながる志の階段を登って行こうとする生徒たちに、何らかの気づきを促すきっかけを与えてくれたのではないかと期待しています。

また昨年10月には、天野 浩氏(高31回卒)のノーベル物理学賞受賞という、本校関係者にとつて言葉では表現できないほど素晴らしい感動的な出来事がありました。青色LEDの小さな青い光が「希望の光」、「勇気の光」となると、西高生二人ひとりの前途を照らしてくれていることに心から感謝しております。

天野教授の座右の銘「憂きことの上につもれかし限りある身の力試さん」が、本校在学時の校長曾根雄二先生が集会等で度々引き合いに出された言葉であったことも私にとつては嬉しいエピソードでした。初代校長畠田與惣之助先生が示された「ヤングジェントルマンたれ」という教育方針を歴代の校長は継承し、それぞれの言葉で、「知仁・勇」のより望ましい表出のあり方を示す指標を生徒たちに伝えてきたことと思われまふ。ジェントルマンという言葉は、意欲と主体性に溢れる自立的な判断力と行動力、そして適切な規範意識やモラルを備えた自律的な生活姿勢を西高生一人ひとりに求めます。本校の校風の基盤を成す「じりつ(自立・自律)」の精神が、生徒一人ひとりの自己信頼(self-worth)を高め、「喜びをもつて困難に立ち向かう逞しさ」を育み、本校生徒を生涯にわたつて社会への貢献を果たそうとする志の高い有為な人材に成長させてくれるものと信じています。併設型中高貫校に移行して13年目、まだまだ発展途上の段階ではありますが、西山台に新たな伝統を築く気概を持つて、これからも活力ある学校づくりを進めてまいります。

本年が、新たな10年に向けて本校が確かな成長を果たす1年となることを願うとともに、浜松西高等学校同窓会がますますの発展を心よりお祈り申し上げ、年頭のごあいさついたします。



静岡県立浜松西高等学校
2015年新春の集い代表幹事
(高47回卒)
村松貴通

新年明けましておめでとうございます。

西高創立90周年、そして、天野浩先輩が静岡県内ではじめてノーベル賞を受賞された記念すべき年に、新春の集い幹事を担当させていただきました。私達高47回卒一同、嬉しさと共に身の引き締まる思いです。先輩方が長年引き継いでこらえた伝統ある新春の集いを、皆様のご理解とご協力のもと開催できることに、幹事学年を代表して感謝申し上げます。

今回のテーマは「繋がる」ですが、キーワードは「3本の矢」です。一本目：諸先輩方と「繋がる」。地元浜松はもとより、日本全国及び様々な業界分野で活躍する諸先輩方と繋がることにより、学生時代では学ぶことができない知恵や知識の習得、西高卒業生としての誇りを学ぶ。特に今回は、ノーベル物理学賞受賞者の天野浩先輩もご参加いただくことができました。天野先輩の素晴らしい功績は、我々幹事学年はもちろんです。西高関係者にやる気を与え、かつ自負の精神と大きな責任感を喚起するものです。

二本目：後輩、西中高の現役学生と「繋がる」。次代を担う若者と繋がることにより、新しい見識と発想力を吸収し自身の活力となる。西高が中高貫校移行後、昨年は中等部期生が社会に巣立つ年でしたので、今回から中等部卒業生も初めてご参加いただいています。三本目：同級生と「繋がる」。卒業してから各々の進路を歩みそれぞれ立場や環境において頑張る同級生と繋がることにより、西高時代には最高の仲間がいたことを再認識する。このような二本、三本の矢が重なり合うことによつて、「繋がり」がより強く、西高・西中の存在感、社会的貢献度がより一層高まることを期待しています。

私個人としても、今まで西高には深い縁を感じ、感謝しています。新卒で入った当時の浜松信用金庫の鈴木富士男理事長は西高先輩、現在の御室健一郎理事長も西高先輩です。そして、社会保険労務士として起業後もたくさんの西高先輩方に支えていただきました。おまけに、西高の同級生の妻とも結婚することができました。西高で本当に良かったと思っています。

新春の集いの準備・運営にあたり、多大なご協力をいただきました同窓生の皆様、快く協賛をいただきました各企業の皆様には、心よりお礼申し上げます。また、何かと至らぬ点がありましたことをこの場を借りてお詫び申し上げます。そして、高47回卒の皆様、本当にありがとうございます。

新春の集いが、同窓生との「繋がり」をより強くし、今後の人生をより充実したものとするための契機になることを祈願いたしました。ご挨拶とさせていただきます。

理学賞受賞おめでとう。



天野 浩

名古屋大学教授
(高31回卒)

Hiroshi Amano

青色LED(発光ダイオード)の開発に多大な貢献をしたとして、赤崎勇氏(名城大終身教授)、中村修二氏(カリフォルニア大サンタバーバラ校教授)とともに2014年ノーベル物理学賞を受賞。西高時代に数学の虜になり、日々教科書や参考書の問題を解くことに没頭していたという。進学は名古屋大学・電子工学科へ。大学3年時に青色LED発見に関する研究が行われていることを知り、赤崎勇研究室の門を叩く。大学院に進むと、赤崎氏が提唱する手法で窒化ガリウムの結晶作製に挑戦。1985年、実験装置の不具合をきっかけに高品質の結晶を作り出すことに成功した。

結晶作製の成功により「20世紀中には不可能」と言われた青色LEDの実現が現実味を帯びてくる。しかし、そのためには、N型(電子が多い)半導体とP型(電子が少ない)半導体の2種類の結晶が必要となる。天野氏はまず、赤崎氏の指導のもとにN型半導体の結晶開発を成功させ、最後の難関であるP型半導体の結晶開発に取り組んだ。赤崎氏の研究をベースに、他研究所の実験結果や文献をヒントにしていた結果、ある時、独自の手法をひらめく。それは、窒化ガリウムに加える物質をマグネシウムに変え(従来は亜鉛)、さらに電子ビームを当てるという手法だった。

この手法により1988年、ついにP型の結晶開発に成功。翌1989年には世界初の青色LEDを実現させることに成功した。



西高時代の天野さん

浜松西高卒業生(高31回卒)



祝 天野さんノーベル物理学賞

Special message

ノーベル物理学賞を受賞された天野さんから、同窓生・現役生へ特別にメッセージをいただきました。

西高は、勉強嫌いの少年を180度変えてくれた場所

■私の西高時代

浜松西高・創立90周年、本当におめでとうございます。

そして、今回のノーベル賞受賞に対し多くの方々からお祝いメッセージをいただいたことに心から感謝申し上げます。

私は中学時代まで勉強する意味が全く理解できず、自他ともに認める勉強嫌いの少年でした。それが西高に入学したことで一変。私にとって西高で一番良かったと思えることは「勉強が好きになったこと」です。

3年間お世話になった恩師・伊藤先生をはじめ、現代国語の杉本先生、古文の村木先生、体育の大石先生など、西高には非常にユニークで温かみのある先生方がたくさんいて、面白い授業をたくさん受けることができました。

特に伊藤保先生の授業は本当に興味深く、数学の楽しさを知ることがかけになりました。数学を通して学んだことは、ひとつひとつステップを踏んで考えること、つまり理論的に物事を進めることの大切さ。これは、私の研究者としての原点にも通じています。

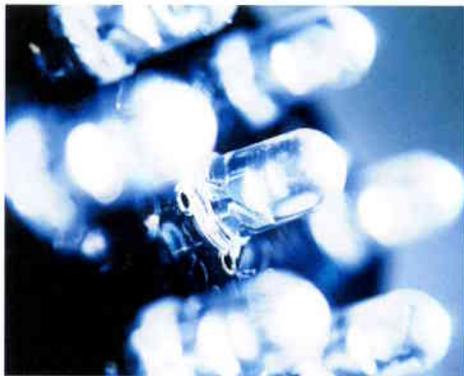
また、同級生たちと切磋琢磨しながら、共に議論し、成長し合ってくれたのも西高です。今回の受

賞でもたくさんのお祝いメッセージをいただき、大変感激しましたし、今後の励みになりました。

■現役生に向けてメッセージ！

浜松西高は「自己鍛錬」に最適な場所です。現在、さまざまな問題に直面している現役生さんも多いと思いますが、地道に自己鍛錬を重ねていけば、どこかで必ず突破口を見つかることができます。また、西高にはそんな生徒たちの成長を万全にサポートする体制が整っているはずですよ。

ぜひ目の前の問題から逃げることなく、正面からぶつかってみてください。その経験が将来、あなたを助け、社会や人の役に立つ力になつていくと思います。「明るく新しい日本」を実現し、支えていくのはみなさんなのですから。



■浜松市について

浜松市は「ものづくり」を通して発展してきた街。現在も世界有数の技術を持った企業がたくさん存在しています。今後、日本が成長するためにはますますこういった「最先端技術の集約」という概念が大切になってきます。その中で、浜松市の担うべき役割もどんどん重要性を増していくと考えております。

■最新の研究について

幸いにして、LEDは広く社会で活用されるようになりました。日本では2020年までに、全ての照明の70%がLED化されると期待されています。LEDが70%まで広がると、日本の全発電量のうちの7%を削減できる計算になります。

2011年3月11日の非常につらい出来事により、現在、日本のすべての原子力発電所はストップしている段階です。その原子力発電の発電量というのは全発電量の30%だと言われています。つまり、LEDで7%の省エネが実現できれば、原子力発電の比率をこれまでの3/4にまで縮小することが可能になります。

さらに近年の研究では、新型の大電力用トランジスタの開発が進んでおり、これが実現できればさらに7%の省エネが期待されています。LEDと併せると14~15%の発電量削減です。現在は、このような省エネの技術・効果を高めていく研究に邁進しているとこ

中高一貫から紡ぎ出す、 西山台の魂

静岡県立浜松西高等学校

校長 木村 功

◆学校創立90周年おめでとう「さいます。節目を迎え改めて、木村校長が考える西高のあるべき姿、伝承すべき精神についてのお考えをお聞かせください。

開校以来掲げている「知・仁・勇」という校訓があります。これは、社会の一員として責任ある生活ができる人間の基本的な資質を表す言葉です。この知・仁・勇を高いレベルで備えた人材を継続的に世の中に送り出していくこと。これが本校の使命であり、90周年を迎えた現在でも変わらず堅持していくべきものだと思います。

◆初代校長・森田与惣之助氏が目指した「ヤングジェントルマンの育成」についてはどのようにお考えですか？

「知・仁・勇」表出の方向的目標、指標であり、大切にすべき育成精神です。森田校長先生は、イギリスの名門パブリックスクール、イートン校の教育理念に学校教育の理想の姿を見出されたのだらうと思います。ヤングジェントルマンとは、民主主義社会の一員としての責任を果たせる判断力、行動力を高いレベルで備えた人間のことだと考えています。

◆「知・仁・勇」、「ヤングジェントルマン」。これら伝統の指針は、今の生徒たちにどのように伝わっているのでしょうか？

私がよく使うのは「自立」と「自

「律」という言葉です。自立とは、主体性を持って行動、判断できる力のこと。自律の方は、人間関係をきちんと維持できる力、さらに社会道徳、マナーを当たり前に遵守できる品性のことです。自立と自律。この2つを有する人間へと成長することが、知・仁・勇、ヤングジェントルマンにも繋がっていくのではないのでしょうか。生徒向けにわかりやすく言えば「物の判断や行動、学習活動に対して、主体的に取り組める人間になるう！」「挑戦する気概を常に持つとともに、健全な社会生活の中で人間関係を大切にできる人間になるう！」ということですね。

◆西高は公立の中高一貫校としての「成功モデル」として認知されています。ここまで成長した理由、秘訣は何であるとお考えですか？

私が思うに、外交的な側面と内



部的な取り組み、その両方が相乗効果を生んで「成功モデル」に繋がったのだと考えます。まず外交的な側面ですが、決定的な要素として「西高のブランド力」が挙げられます。80年の歴史で築き上げられた公立高校としての実績。これが浜松という地域に広く浸透し「西高は信頼でき、期待できる学校」と位置付けられるようになりました。こういった地域の期待感や応援の眼差しが、中高一貫をスタートさせる上で大きなアドバンテージになったのではと考えます。

内部的な取り組みについては、中高一貫スタート時にその本質的な仕組みやメリットを明確に示すことができたことが挙げられます。大変なご苦労や試行錯誤を重ねたと思いますが、当時の学校関係者の努力が実を結び、地域の注目度、生徒の知的意欲が一層促されたのではないのでしょうか。

◆中高一貫校としてのメリットとはどのような部分だとお考えですか？

本校は併設型の中高一貫校です。で、高校受験の際に2クラス・80名の入学を募っています。いわゆる外進生ですね。この外進生の存在がとても重要で、本校のメリットとも言える部分です。外進生は、中等部から進学する内進生とはまた別の観点から選抜され入学してきますし、向上心、学力ともにとっても優秀です。このような内進生、外進生の両方が在籍していることで、ある種の化学

反応が起これ、学校全体の活力や推進力が途切れることなく続いていくのではないかと考えています。

◆反対に中高一貫校のデメリットや課題、問題点などはありますか？

ありがたいことに、本校の中等部には「各小学校のトップクラス」が集まっています。彼らはみな、出身小学校のさまざまな活動において責任あるリーダーとしての役割を与えられてきた生徒たちです。しかし、優秀な生徒が160人集まったからと言って、本校で160種類のリーダーを用意することは容易ではありません。つまり、本校の中等部に入っただことで一部の生徒は「自分に対する自信を失ってしまう」という問題に直面しています。これまで当たり前だと思っていた「自分はやれるんだ」「自分は期待されているんだ」という自信が、消極性を帯びてきてしまうんですね。自己肯定感の向上に向けて、どう対処していくかが本校の課題のひとつであると認識しています。

◆課題に対しての具体的な取り組みはなされているのでしょうか？

学校全体を通して「未知の分野にチャレンジすること」を推奨する取り組みを行っています。初めてやること、初めて出会う人、初めて見る景色、何でも構いません。とにかくいろいろな分野のいろいろなことにチャレンジする機会を増やすことで、生徒自らが自分の力を確認し、失敗を通じて弱点を発見したり、新しい人間関係を築いていけるように成長

を促すことが狙いです。そのような経験を通じて「本当の意味での自信とは何か？」を考えるきっかけになってほしいと願っています。

◆木村校長は24年度（2012年4月）にご就任されました。今年度までの3年間で特に力を入れてきた活動について教えてください。

24年度というのは中高一貫となつてちょうど10年が経過した年です。私が着任してまず行ったのは、（主に学習面に関する）10年間の検証でした。その検証結果から「授業時数を増やすこと」「家庭学習の充実に働きかけること」などの改善点を洗い出し、3年間を通して、生徒の基礎学力向上に焦点を合わせた教育に力を入れてきました。現在は、この3年間の方針がどのような成果をもたらしたかの検証作業に取り組んでいます。

◆ありがとうございます。最後にこの記念誌を読まれる方々にメッセージをお願いたします。

本校の卒業生はこれまでに約2万6千人を数えます。その卒業生一人ひとりが、さまざまな地域、さまざまな分野において大変な活躍をされていることと存じております。私はこの2万6千人の方々こそ「西高の一番の応援団」であり、本校と在校生にとってかけがえのない安心と共感をもたらしてくれる存在だと信じています。世界と日本、地元浜松の社会を牽引し、「私のルーツは西山台にある」と誇りを持って宣言できる人材を育てていくために、今後とも本校の教育活動に温かなご理解とご支援のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



島根県から来た「1年だけ西高生」 30年の時を経て同窓の輪のつなぎ手に

2013年、遠州鉄道株式会社 取締役社長に就任した齊藤薫さん。「1年しかいなかったけど」と苦笑いを浮かべつつ、西高時代の貴重な思い出話、次世代に向かう、西高の輪の重要性について語ってくれた。

◆西高には転校生としてご入学されたそうですが、浜松に引越してきた経緯を教えてください

昭和45年1月、父の他界をきっかけに島根県浜田市から母の故郷である浜松市に引越してきました。南区小沢渡町にある親戚の家に居候することになったんです。私が18歳になる年ですね。夜行寝台列車「出雲」に乗って、浜松駅に到着したのが深夜1時頃。辺りは真っ暗でしたが、そんな中でも、駅前にそびえ立つ大和銀行（現りそな銀行）の建物に圧倒されたのを覚えています。親戚の家に向かう道すがらでは、成子坂（中区成子町）の辺りに陸橋があつて、橋下を見ると新幹線の線路。「ああ、浜松には新幹線も通っているんだ」と思うと、島根県とはあまりにも異なる環境に不安を覚えつつ、純粋に「すごい大都会に来ちゃったな」とも感じましたね。

◆西高に転校されたきっかけは何だったのでしょうか？

簡単に言うと、選択肢がなかったんです。転校枠が空いている高校を調べてみたら西高しかなくて。しかも、合格者は男女1人ずつという狭き門でした。合格できたのは幸運でした。西高は当時からとても人気のある学校だったようで、ひとまず別の高校に通わせながら転校枠が空くのを待つ人たちもいました。親戚からも「西高に合格するなんてラッキーな奴だ!」って言われたくらいです。

◆高校3年時のみの在籍でしたが、学校生活で印象に残っている出来事などはありましたか？

転校生なので友人はいないし、クラブにも参加していません。基本的には家と学校を行き来するだけの生活でした。思い出と言えば、

遠州鉄道株式会社 取締役社長

齊藤 薫

(高23回卒)

Kaoru Saito



親戚が農家をしていたので、その手伝いをするのが日課になっていたことですかね。玉ネギやスイカの収穫、遠州灘や浜名湖での蟹網や投網、潮干狩り。学校生活よりもそういった経験の方が強く印象に残っています。特に市場へ野菜を売りに行くのが楽しかったですね。当時、JR高塚駅の西側と磐田市に市場があつて「この野菜は高塚より磐田の方が高く売れる」なんてことをいつも考えていました。

それと「なんでこんなに餃子好きなの？」って（笑）。授業が終わると同級生たちが「帰りに餃子屋寄ろうぜ」という会話をしているのをよく耳にしていました。喫茶店でコーヒーならわかるけど、餃子屋で餃子を食えるという習慣があることにびっくりしましたね。今でこそ広く認知されていますが、私が学生の頃から浜松人〓餃子好きは浸透していたように思います。

◆校風や授業内容について思い出深いエピソードがあれば教えてください。

まず、女子生徒が非常に少ないと感じました。私は31日Rで総勢53名いたのですが、女子生徒はわずか13名。転校試験を受けた時は、確か男性が5名、女性が20名くらい受験していて、私は勝手に「西高は女子生徒が多い」と思っていたのですが……見事にダメされました（笑）。授業内容はレベルが高いというより、進行状況に苦労しました。例えば、物理。島根の学校だと3年生で物理をやるのですが、西高は

2年生で完了。だから、物理の単位は取得できませんでした。修学旅行も同じですね。普通は3年時に行くものだと思っていたのに、西高の修学旅行は2年生なんです。受験に集中させるためなのでしょうけれど、私が在籍していた1年間では印象に残るような学校行事は何もなかったように思います。

昭和27年12月21日生
県立浜田高校(島根)→浜松西高→明治大学
趣味/スイミング(週2回は泳がないとイライラする)
好きな言葉/そなえよつねに

◆当時の西高と現在の西高を比較して、変わったなと感じる部分は何ですか？

中高一貫になったことで、ますます「西高ブランド」の価値が上がっていると感じます。進学先一覧を見ると国公立大学がズラリと並んでいて、その優秀さに感服しています。生徒の地頭が良く、学校の管理体制がしっかりしているんでしょうね。多くの親御さんたちが「わが子を西高に！」と思う気持ちがよくわかります。

◆西高OBで良かったと思える瞬間はありますか？

同窓会などのお誘いを受ける機会がなかなかなかったのですが、47歳の時に遠州鉄道不動産事業部長になった関係で、23回卒のグループ「フルカウント」(野球のフルカウント〓ツー・スリーから由来)に参加するようにになりました。そこから一気に同級生との繋がりが広まりましたね。23回卒には建設関係者の方が多数いらっしゃって、同じ西高出身、同じ分野のお仕事ということですね。なり打ち解けることができ、事業の相談に乗ったり情報交換をしたりと、同窓会の枠を超えたメリットを共有することができました。現在はフルカウントの活動だけでなく、「西高同窓会フォーラム」にも参加するようになりました。西高出身者のみならずは本当にさまざまな分野でご活躍されています。浜松ホトニクス、ちようと昨晩、会食をしてみました。「私は1年しかいなかったんだから、晝馬さんが代わりにインタビュ受けてよ」なんて話で盛り上がりました(笑)。このような西高出身同士の輪が、私たちの世代はもちろん次の若い世代へもしっかりとつなげていくことを期待しています。お時間がある場合は、ぜひ「西高同窓会フォーラム」にもご参加ください。





相撲の一番の魅力は、「私に合っているから」

見た目は普通の女子高生。しかし、その注目度はいまや全国区。次世代の美人アスリート、角界のヴィーナス、可愛過ぎる相撲ガール…。さまざまな形容詞とともに多数のメディアに引っ張りだこの野崎舞夏星さん。そう、彼女こそ「女子相撲の未来を牽引する」スーパー西高生なのだ。

Manaho Nozaki

平成8年7月17日生
浜松西高等部→浜松西高(柔道部)
天方相撲クラブ、SSファイターズクラブ所属
戦績
2013/2014:国際女子相撲選抜杯大会(一般軽量級)優勝
2014:世界ジュニア女子相撲選手権大会(軽量級)優勝
2014:全日本女子相撲選手権大会(一般軽量級)優勝
趣味/映画鑑賞
好きなプロレスラー/KENSO
好きな芸能人/能年玲奈

◆相撲に限らず、レスリング、柔道でもトップクラスの実力者。そもそも格闘技をはじめたきっかけは何ですか？

家族が大のプロレスファンで、母の初恋相手はアブドラー・ザ・ブッチャー(笑)。幼い頃から当たり前のように「プロレスのある生活」だったので、格闘技に関して抵抗など切なかったんですよ。やがて、兄がレスリングクラブに通うようになって、私も自然と参加するようになったという感じですね。レスリングは小学校1、2年生くらいからはじめました。

◆相撲と柔道はいつからはじめられたのですか？

レスリングの先生が地域の相撲大会にも携わっていて「わんぱく相撲に出てみない？」と言われたのがきっかけです。最初は何となく出場していただけでしたが小学4年生くらいから本格的に取り組むようになって、天方相撲クラブ(中区神田町・天方産業内)で稽古をするようになりました。柔道は西中に入ってからですね。レスリング部がなかったの「じゃ、柔道部かな」って。体力を鍛えられる部活が良かったので、陸上部やバスケットボール部も候補だったんですけど。

◆女子相撲に魅力を感じたのはなぜですか？

一番は自分に合っているから。私って性格的に「短い時間に集中する」のが得意なんです。そう考えると、レスリングより相撲。一瞬の集中力で勝負が決まるスポーツですからね。あと、自分より大きな相手に勝つことができるというのも魅力的な部分です。

◆レスリングと相撲には共通点がありますか？

かなりありますね。柔道もそうですよ。私が女子相撲で結果を出せるようになったのは、レスリングと柔道をバランス良くやってきたおかげだと思っんです。



2014年の世界ジュニア女子相撲選手権大会(軽量級)決勝は「足取り」で勝ったのですが、これはレスリングのタックルと全く同じ動きなんですよ。

◆強くなるための秘訣など、意識していることはありますか？

秘訣かどうかはわかりませんが、私、試合場に着くとまず優勝者に贈られるメダルやトロフィーを見るんです。そうすると「これをもろうために私は来た！絶対に勝つ！」って闘志が湧いてくるんですよ。表彰台もそうですね。「私はあの表彰台の一番高い所に立つ！」ってイメージすると強い気持ち湧き上がってきます。

◆日々の練習に取り組む姿勢について気を付けていることはありますか？

人一倍負けず嫌いな性格だからか、私、怒られるのが大嫌いなんです(苦笑)。特にみんなの前で先生に怒られるのとか本当にイヤ。だから、練習の時はとにかく「怒られないように」という気持ちでやっています。レスリングの先生は「野崎が一番真面目に練習している」なんて言いますが、私はただ「怒られないように」やっているだけなんです(笑)。

◆格闘技をやめたいと思ったことはないですか？

「ない」と言ったら嘘になります。相撲に関して言えば、上下関係とか礼儀が厳しくてそれが嫌になっちゃったことがありますね。でも、相撲自体は大好きだし、自分に合っているスポーツなので何とか思いとどまりました。レスリングもそうですが、私が幼少期からずっと続けてきたもの。やめるのは簡単ですが、ふと「これが私の取り柄なんだ」と思うと愛おしくなってしまうやめることができないんですよ。

◆現在高校3年生。進学は女子相撲部のある大学ですか？

はい。いろいろお誘いをいただいて、女子相撲部のある大学をいくつか見学しました。第一志望は立命館大学です。女子相撲部の強豪で、先生も素晴らしい方だし、先輩方の雰囲気、施設や環境などにもとても興味がわきました。私が目標とする女性力士、山中未久さんが在籍しているのも志望する理由。山中さんは2013年の全日本決勝で敗れた相手。すごく強くて全く歯が立たなかったの、同じ学校の同じ土俵で一緒に稽古を

してみたいんです。何とか入学できると良いんですけど……。

◆世界大会で優勝し、さまざまなメディアに取り上げられてすっかり有名人。これだけ注目されるといのはどんな気分ですか？

最初は恥ずかしかったですね。でも、こうやって私が取り上げられることで女子相撲への注目度が上がるのなら良いのかな。うれしかったのは、世界大会で優勝した時。教室の背面黒板にすごく大きな紙が貼ってあって、そこに「まなほちゃん優勝おめでとう」って。クラスのみんながサプライズでお祝いメッセージを作ってくれたんです。大きな紙をよく見ると、横試の用紙を裏にして張り合わせてあったんですけどね(笑)。

◆最後に将来の夢について教えてください。

まずは立命館大学に合格して、4年間相撲に打ち込んで、もっともっと強い力士になりたいですね。その後は……。最近はずレビ局の仕事に興味があります。まだ先



のことなので何とも言えませんけど。もちろん女子相撲の発展につながるような活動にも興味があります。例えば2020年の東京オリンピック！オリンピック種目に男女の相撲があれば最高ですけど、そうでなくてもデモンストレーション武道として女子相撲が加わってくればうれしいですね。





輝くヴィーナス

Venus 02

株式会社静岡新聞社
福集局 社会部 記者

中村 宝子

(高59回卒)

西高に対しては 感謝の気持ちでいっぱい

在学中に女子200m・ジュニア日本記録を打ち出し、日本代表にも選ばれた中村宝子さん。西高陸上部の輝かしい歴史において、今なお突出した存在感を誇る元トップアスリートだ。



Takarako Nakamura

昭和63年10月3日生
高台中→浜松西高→福島大学→慶応義塾大学→博報堂DY
メディアパートナーズ→静岡新聞社
2006年、高校3年生で出場したインターハイで優勝(200m・ジュニア日本新記録)。同年カタールドーハで行われたアジア大会の日本代表に選ばれる。アジア大会では200mで5位入賞、4×100mリレーで銀メダルを獲得



◆西高時代の思い出について教えてください。

3年間、陸上漬けの毎日でした。終業チャイムが鳴ったらすぐグラウンドに出て、週に2〜3回は四ツ池公園陸上競技場での練習。ハードでしたが、とにかく必死になつて打ち込んでいましたね。こういう環境を与えてくれた西高には本当に感謝しています。

◆陸上競技をはじめたのはいつからですか？

中学1年生(高台中)ですね。当時は走り幅跳びでした。短距離走に転身したのは高校に入ってから。陸上部顧問筒井計臣先生のご指導がきっかけです。「私は足が速い」なんて微塵にも感じていませんでしたが、入部してすぐに先生から「幅跳び

で結果を出したいならもっと走り込まないと」と言われて。それで短距離の練習を入れられるようになったんです。

◆それでも高1のインターハイですでに全国6位(200m走)すごい成長ですね。

幅跳びのために走りの練習をしていたのに、気付くとドンドン速くなっちゃつて。200m走にエントリーしたのは初めてだったので、特に目標を定めず走つていたのですが「あれ? 良いかも」つて(笑)。気付いたら全国で入賞していました。あと、筒井先生がおっしゃった通り、走りが良くなると幅跳びの成績も伸びました。高1の国体で2位になったんです。

◆幅跳びではなく、200m走をメインに選んだ理由は何だったのでしょうか？

単純に、幅跳びよりも200m走の方が私に合っていたからです。それと、私は1988年生まれなのですが、同世代に福島千里さん(北海道ハイテクA・C)、高橋萌木子さん(富士通陸上競技部)がいて、日本女子短距離の黄金世代でした。高校から短距離をはじめた私はつねに挑戦者の立場。正直「入賞できて1位にはなれないかな」とも思っていました。だからこそ、逆に燃えたのかも知れませんね。

◆成長するための秘訣などありましたら教えてください。

あるとしたら、すべての練習に対してつねに全力で取り組んでいたことですね。そして真剣に競技と向き合うことです。日々の鍛錬の積み重ねがあつてこそ、好タイムにつながつていったのだと思います。

◆レースの時に気を付けていたことはありますか？

200m走というのは選手同士の駆け引きとか作戦がとっても重要になってくるんです。私が理想とするレース展開は「ス

タートからゴールまでガンガン全力でいく」とこと。高校3年時のインターハイ決勝レースではこの作戦がうまくいきましました。ある意味、他の選手との駆け引きは度外視して終始全力で走り抜ける。結果、ジュニア日本新記録というタイムになりました。

◆最後に記念誌を読まれる方へのメッセージをお願いします。

西高には感謝の気持ちしかありません。こんなにも温かく伸び伸びと育てくれたんですから。西高の先生や同窓生、家族や地元の方々……。私は本当にいろいろな人に支えられてここまでくることができました。残りの人生...と言うにはまだ早いです(笑)、これからは、競技者時代にお世話になつた方々に何らかの形で恩返しをしていけたらと考えています。



陸上部顧問・筒井計臣先生のメッセージ

「伸びる子」というのは身体的能力はもちろん、精神的能力も備わっています。中村も決して順調ではなかったですからね。何度も壁にブチ当たってケガもしました。でも、その都度「乗り越えられる素質」を発揮していました。苦しい時こそがんばれて、負けず嫌いで、自分に厳しい。そんな素質が精神的能力と呼ばれるものです。練習の最後に100mのタイムを計る時はいつも「ラスト1本が今日の最高タイムじゃないとどうしようもない」って言うましたから。時間がある時でいいので、ちょこちょこ陸上部の練習に参加してもらいたいです。現役陸上部のどの選手よりもキレイなフォームで走るので、間違いなく生徒たちの刺激になりますよ。

甦る繋がり記憶

～3名の現役生と6名の卒業生(47回卒・39回卒)によるTsunagaru座談会～

2014年10月21日、記念館にて行われた現役生と卒業生による座談会。

中高一貫の“今”を伝える声と、浜松西高校の“前身”を知る声。

その両者が入り乱れ、思い出話や新しい発見が次々と飛び出す活気あるひとときに包まれた。

村松 本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。早速ですが、現役生のみなさんの自己紹介からお願いします。

黒木 私たちは全員高校2年生で、吹奏楽部に所属している仲間です。

岩澤 みんな中等部から？

山本 私と黒木さんは中等部から。石川くんは高校からだよね？

石川 そうです。八幡中学から入学しました。

安田 それぞれ西高に入学したきっかけは何だったの？

山本 私は夏休みのオープンスクールで西高の存在を知りました。最初は地元の中学校に進もうと思っていたのですが、父から「環境も整ってるし、すばらしい学校だと思っよ」って薦められて。それで中学受験に切り替えた感じですね。

黒木 私は西高の吹奏楽部に憧れていたのと、あと制服がかわかったのが理由です(笑)。

大杉 西高の女子の制服って、私たちの時も周囲から「かわいい」って言われていました。でも特徴的だから、登校や下校の時はちょっと緊張するんですよね。やんちゃなことするとすぐ「西高生だ」ってバレルから(笑)。

内田 夏服のデザインは今も昔も変わってないですよ。確かに他校とは違う印象。

岩澤 石川くんは高校から入学ですけど、きっかけは何だったの？

石川 僕もオープンスクールがきっかけでしたね。学校の雰囲気とか勉強に真面目に取り組んでいる姿勢とかがすごく気に入



対談参加者

現役生

黒木智穂(2年)
山本梨紗(2年)
石川元啓(2年)

39回卒

岩淵千江
内田朱美

47回卒

岩澤加奈子
安田恵
大杉幸

司会

村松貴通
(同窓会幹事年会長/47回卒)



入って、それで受験してみようと思いました。

岩淵 受験勉強は大変じゃなかった？

石川 うーん。そんなに大変という印象はありませんでした。学校の勉強をちゃんとやっていれば合格できるような気がしませんでした。

内田 中等部の受検は、単に勉強ができるだけじゃダメで、独特の問題が出るんですよ。

山本 そうなんです。なんて言うのかな？クイズ形式みたいな問題でしたね。

黒木 登場人物がいて、会話調で、ストーリーを追っていくような問題だった気がします。



となんでしようね。

山本 小学生の時、テレビの「熱血！平成教育学院」っていうクイズ番組が好きでよく見ていたんですね。私が合格した理由はそれだと思います。テレビで出されるクイズ的というか、なぞなぞみたいな問題が西中の受検とよく似ていましたから。

岩淵 そういえば、今でも男子クラスってあるのかしら？

黒木 男子クラス！？ 聞いたことないです。

安田 私たちの時もあったよね。男子クラスは、3、4、5組の3クラスだったと思う。修学旅行も男子だけで行くからかわいそうだった（笑）。

天杉 教室に入ると男臭いモワッとした空気感があつたよね（笑）。

村松 僕らの世代は圧倒的に女子生徒が少なく、450人中100人くらいしかいなかったんだよ。だから、男子クラスが3クラスもあつたんだと思う。その中の1クラスが選抜クラスだったね。

山本 そうだったんですね。今はどうなんだろう？ 理系の22HRは41人に対して女子が17人くらい。文系のクラスになると女子の方が多い気がします。

黒木 中等部は半々くらい。高校になると男子が若干多い気がします。

石川 今は6クラスしかありませんからね。その内ひとつが特進クラスなので、それが昔で言う男子クラスなんだと思います。

村松 特進クラスの人はいる？

黒木 私は高校1年生から特進クラスです。毎年選抜があるみたいなんですけど何とか2年時も特進をキープできました。

内田 私が聞いた過去の問題で「飲みかけの缶ジュースを机に置いたまま、外に遊びに行きました。帰ってきて机の上の缶ジュースを見た瞬間、すぐに『缶の中にまだジュースが残っている』ことがわかりました。なぜでしょう？」みたいなのがあつたって（笑）。

安田 面白い問題ですね。答えは？？？

内田 缶が汗をかいている（結露している）から、だったと思います。

安田 なるほど！

山本 私が受検した時もそういう問題が多かった気がします。西中は合格する基準が複雑なんですよ。模試の判定がずっと「A」なのに受からなかった子がいたり、反対にずっと「D」の子が合格していたり。私も合格した時に、母と「なんで受かったんだろうね？」って不思議に思ったくらいですから（笑）。

大杉 科目の勉強だけできてもダメってこ





黒木 吹奏楽が大好きなので、トランペットをずっと吹いていられることですね。高校卒業まで部活を引退しなくていいから。

山本 中学卒業で二度リセットしなくていいところ。6年という期間の中で、計画的に自分の好きなことをやり続けられるのは他校にない良さだと思います。

石川 僕は高校からなのでよくわかりませんが、中等部からいる同級生を見ると、学校生活の「流れ」みたいなのがしっかりできていて、勉強も部活動もスムーズに進めることができていると感じます。僕たち高校入学組はその「流れ」を掴むまでに結構苦労しましたね。

黒木 1年生の時と比べてだいぶ痩せたもんですね（笑）。

石川 いや、それはたまたま（笑）。でも、入学当時は勉強の進むペースが早くてびっくりしました。僕が受検のためにやっていた勉強の範囲なんてとっくに終わっていましたからね。

岩淵 今の校則ってどうなんですか？ 厳しい？

黒木 女子は髪型とかスカート丈はチェックされますね。最近だと、男子の髪型でツブロックがNGになりました。

安田 流行ってるからね。

山本 あと、学校敷地内では自転車に乗っちゃダメってなったよね。坂を猛スピードで下りる生徒がいて危ないからなんだけど……。

岩淵 え？ ということは、坂の上り下りの時も自転車から降りるの？

石川 はい。そうになりました。

内田 下りはそうだけど、上りはいいんじゃない？ あの急な坂をあえて自転車ですりきるっていうのが運動部のプライドなんだから（笑）。

村松 校則と関連して、男子はブレザー着用になりましたよね。

石川 はい。冬は指定のブレザーで、夏は半袖や長袖のYシャツです。

安田 Yシャツも指定のもの？

石川 いえ、白であれば特に決まりはないです。

山本 男子の夏のお洒落は「Yシャツの下に何色のTシャツを着るか？」だよ（笑）。Tシャツの色が透けて、白いYシャツを黄色や赤に見せるっていう。

岩澤 若かりしこだわりですね（笑）。体育の時のジャージは？

安田 私たちの時は上下水色だったわけ？ 女子は鉢巻をしていたような……。

岩澤 鉢巻ありましたね。「きれいな畳み方」とかいろいろみんなで考案していました（笑）。

岩淵 私たちの時代は水色のジャージじゃなくて、上下緑ですごくダサかった。「緑虫」って呼ばれていたからね（笑）。チャックなんて洒落たものも付いていなくて、単なるジャージ素材のトレーナー上下。

黒木 今のジャージは水色っていうよりブルーですね。一応アシックスですけど、みんな「ドラえもんジャージ」って呼んでます（笑）。

村松 購買部はよく使いますか？

黒木 たまに。おにぎりとかサンドイッチとか買いますよ。

山本 みんなお弁当持参だよ。

大杉 購買部で思い出すのは「あんバター」。あのパン人気あったよね。

岩澤 黒糖パンとか、名前忘れちゃったけど、銀の包装がしてあるチョコのパンも人気があつてなかなか買えなかった気がする。

岩淵 「あんバター」覚えてる！ 誰かが誕生日だとみんなでお金出し合つて「あんバター」をプレゼントしてた（笑）。

山本 今だとミルフィーユのパンがあるんですけど、それがおいしいですね。

村松 話は変わって、現在の校舎って僕たち（47回卒）が入学した時に完成したのなんですか？

山本 そうなんですか？

大杉 もう20年以上経つんだよね。あの頃はピカピカの校舎だったから「私たちラッキーだな」って思ってたもん。

山本 へえ。でも私、西高の校舎好きです！ ちょっと遠目から見た感じが。すごくカッコいいですよ。



甦る繋がり の記憶



黒木 校舎の中もそんなに「古い」って感じしないよね。

若淵 中等部も二縮の校舎なんですね？

石川 はい。高1と高2の4クラスが5階で、高3と中3の2クラス、高2の2クラスが4階。中1と中2、中3の2クラスが3階です。

村松 これから学校行事の中で楽しみにしていることがありますか？

黒木&山本 再来週から行く修学旅行！

安田 どこに行くんですか？

黒木 沖縄、北海道、年によっては九州、長野から選べるんですけど、私たち吹奏楽部はみんな北海道に行きます。

安田 え？ クラス単位で行き場所を決めるんじゃないって？

山本 個人で選択できますね。

岩澤 そうなんだ。私たちの時は広島だったかな。北陸の方に行く班もあったけど。

大杉 京都とか奈良もありましたよね。

村松 高校の一大イベントですからね。ぜひ楽しんで、気を付けて行ってらっしゃい！

では最後に、現役生のみなさんの将来の夢について教えてください。

黒木 私は音楽に携わる仕事がしたいので、ゆくゆくは音楽の街・浜松で活躍できたらと思っています。でも父の出身地の神戸にも住んでみたいし、志望校は九州の方ですし…。実際どうなるかは未定です(笑)。

山本 医療系に進みたいです。小児科とか婦人科に興味があります。学力的にまだまだ不十分ですけどもって勉強をがんばって、将来お医者さんになれたら良いなと思っています。

石川 僕は…特にまだ夢とかないんですけど、文系なので文学部のある大学に進みたいと思っています。姉が二人いるんですけど、二番上の姉は西高の中等部から高校に進んで、今は静岡大学に在籍しています。

そういった身内からのアドバイスを聞きながら、今後の人生設計を立てていきたいですね。ちなみに2番目の姉は浜松北高から東京の大学に進みました。

大杉 北高って言えば、私たちの時代はよく「西高はつねに北高に勝つように、もって覇気を出せ！」って言われたのを覚えています。北高に対するライバル心って今でもあるんですか？

山本 うーん、多少はあるとは思いますが。

石川 ライバルと言うより、校風の違いなんじゃないかな。北高ってすごく自由な感じで、自主性にまかせている感じがあります。反対に西高は、学習方法とか内容とかがすごく考えられていて「浪人しないで進学させよう！」っていう生徒の未来のことをすごく考えてくれる印象があります。

山本 私は西高のそういうところがすごく好き。

黒木 確かに教育に熱心ですよ。私も自分の性格に合っているのは西高のやり方だと思います。

内田 ノーベル賞を受賞した天野さんをはじめ、県内外、世界でも活躍する人が出てきますからね。これからもどんどんそういう人たちが出てくると良いですよ。

安田 私たちもがんばらないと(笑)。

村松 そうですね。現役生、卒業生ともに、これから「西高卒」の名に恥じない活躍をしていけるよう邁進していきたい！本日は本当にありがとうございました！



自分のありたい姿とは何か？
初心に戻った時、
幸運は舞い降りる

NHK交響楽団 トランペット奏者

山本 英司

Eiji Yamamoto

昭和51年10月1日生

浜松西高→東京藝術大→フリーランスのトランペット奏者→

読売日本交響楽団→NHK交響楽団

師匠 / NHK交響楽団元首席奏者・北村源三氏

家族構成 / 妻・2女

自身38回目の誕生日である2014年10月1日付けで、NHK
交響楽団員(トランペット奏者)に就任

2014年10月、日本が世界に誇るオーケストラの最高峰・NHK交響楽団のトランペット奏者に就任した山本英司さん。「音楽の道」を決意した西高時代から現在までのサクセスストーリーを紡ぎ出す。

◆音楽への道を志したのは西高時代とお聞きしました。

小学校4年生からトランペットをやっていた、本気でこの道に進もうと思ったのは高校2年生の秋。吹奏楽部の顧問・白井秀幸先生(当時)に呼び出されましたね。親と私の三者面談だったので「息子さんを音楽の道に進ませる気はないですか?」って。その言葉を聞いて急にモヤが晴れたというか、心のどこかでくすぶっていた「音楽を続けたい」という気持ちが押し出されました。それまでは理系のクラスにいたので「将来は数学の先生にでもなろうかな」くらいに考えていたんですけどね。でも、この面談をきっかけに「音楽をやりたいです!」って。

◆音大受験のための生活とはどのようなものですか?

授業中は学生服の袖にイヤホンコードを通して聴音の勉強したり、楽典の教科書を開いたり。あと「この授業、僕には必要ないので音楽室に行ってもいいですか?」とか(笑)。申し訳なかったけど、すでに学校の授業は何の意味もなかったんですね。もちろん放課後は家庭や音楽室に行つてトランペットを吹きまくりました。あと、受験科目にピアノがあったので、週5日くらいピアノ教室



に通っていました。先生からは「1年じゃ絶対無理!」と言われましたが「無理なら這い上がります」と突っぱねて(笑)。とにかく死に物狂いでしたね。

◆そんな逆境を乗り越えて、見事現役で東京藝術大学に合格! 順調な音楽生活の幕開けですね。

いやいや、厳しい世界ですよ。実際に東京藝大の同級生でも現在音楽を続けているのは数人です。僕は大学を卒業した後「日本音楽コンクール」で本選まで進んで、ある程度名前を知ってもらえたのが良かった。でもコンクールに通るまでは極貧生活でしたから。生きるために皿洗いのバイトをしたんだけど、それだとトランペットの練習が疎かになる。「俺、何やってるんだろ?」ってたまらない気持ちになりましたよ。

◆コンクールに通つてからは、ある程度活動の幅が広がったのですか?

そうですね。5年ほどフリーランスのトランペット奏者としてさまざまなコン

サートに呼ばれて吹いていました。でも、この期間もなかなか大変で…。まずどこへ行っても「コンクールに通つた山本英司」っていう目で見られるんです。「相当の実力なんだろうな?」って。それがすごくプレッシャーでストレスでした。だんだん「みんなが必要とする山本英司を演じなきゃ」という気持ちになり、そうすると「自分のラッパはこうだ!」が2の次になつてしまふ。フリーランスの身だから一度失敗すると二度と呼んでももらえないしね。そういうさまざまな葛藤のあつた5年間でした。

◆28歳の時に読売日本交響楽団に入団されています。きっかけは何だったのですか?

まず、僕たちの世界で「定収入」が見込めるのはオーケストラだけなんです。だからみんなオーケストラの空き枠を狙つて、オーディションがあればものすごい数の奏者が殺到するんです。僕も同様に「いつかはオーケストラ」という思いを抱いていて、フリーで活動しながらいくつものオーディションを受けていました。ことごとく落とされましたけど。前述した通り、当時の僕はだんだん「自分のラッパ」というのがわからなくなつてきて、周囲の期待に応えようとはかりしていた。「周囲の期待には応えたい。でもそうすると、自分の音は封印される」というジレンマに追い込まれていました。トランペットをやめようと思つたくらいです。そんな時、読響のオーディションがあると知つて、もう「こしかかない!」と。とりあえず周囲の雑音をすべてシャットアウトして、何日も吹くことをやめました。

そして「自分は本当にラッパが好きなのか?」「自分が本当に出したい音って何なのか?」をじっくり考えたんです。

◆一度初心に戻つてから、オーディションを受けたんですね?

そうですね。気持ちはガラリと変わつて「自分のラッパを吹こう。自分の音を出そう。それが認められなければラッパをやめよう」って。オーディションの時も「僕はこういう音を吹くので、必要ならどうぞ」って上から目線(笑)。そういう気持ちで吹いたら合格しちゃつた。不思議なものです。もちろん自信にもなりませんでしたよ。「自分のやつてきたことは間違つていなかったんだ」って。

◆成功のカギはそういうところにあるのでしょうか?

タイミングや運も大事ですが、チャンスが来た時に確実に掴み取るためには「自分のありたい姿とは何か?」「自分は人に何を伝えたいのか?」をしっかり確認しておくことが大切なのかも知れません。先輩、先生、ライバル、仲間…。僕たちの周囲にはたくさんさんのアドバイザーがいます。どれも大変ありがたのですが、アドバイスを受け入れた上で、最終的に「どう表現したいか?」は自分にかかわらないこと。今年、NHK交響楽団に移籍できたのも、読響というステージで自分という存在を表現し続け、自分が伝えたいものを伝えられ続けたからだと思います。



NHK交響楽団

日本を代表する交響楽団。1926年に日本最初のプロ・オーケストラ「新交響楽団」として発足し、その後「日本交響楽団」の名称を経て、1951年にNHKの支援を受けることになり、「NHK交響楽団」となる。設立初期より約40年間に渡ってジョセフ・ローゼンストックが専任、常任、名誉指揮を務め、日本を代表するオーケストラとしての地位を築いた。その後も世界トップクラスの指揮者を招聘、豪華なソリストたちと共演し歴史的名演を残す。その活動は、世界的にも高い評価を得ている。多くの演奏家があこがれる、日本では最高峰のオーケストラ集団である。

輝きを未来へつなぐ

SPECIAL MESSAGE



文部科学省初等中等教育局
国際教育課外国語教育推進室
事業推進係専門職

石原 麻美

中学校教員から文部科学省職員になって早二年。大学卒業以来の東京生活。満員電車に乗り、霞ヶ関に通う生活にも慣れてきました。

「教員は天職」そう思い続けて十三年。教員である父の後ろ姿を追いかけて、大好きなバレーボールを子供たちに教えたい、「選手でも指導者でも全国大会出場」という強い夢を抱き、教員の道へ。素晴らしい生徒、保護者との出会いがあり、夢が実現。周囲からの信頼や期待に応えようとやりがいあふれる日々を送っていた私にとって、突然の異動。

外国語教育推進室への赴任当初から東京オリンピック開催が決定し、過熱していた英語教育に拍車がかかり、英語教育の抜本的改革が本格的に！有識者会議を定期的に開催し、他省庁や国会への対応、全国展開の多額な事業を複数掛け持ち、指導主事経験もない私が全国の指導主事を指導する立場に……。ここでの決断が全国の学校に普及するという重責へのプレッシャーと日付が変わるまで仕事をする日々、心が折れそうに……。それでも、世界を股に掛けた英語教育の最先端で仕事をしている方々となることができたのは大きな財産です。また、今までは違った角度から学校を見ることで、「教員」という職業を選んできたことと心から思っています。ここでの経験や出会いを糧にして、さらにパワーアップして教員に戻りたいです！



Cisco Systems
WebEx Virtual Account Manager

手塚 玲子

就職して1年目、久しぶりに訪れた東南アジアの友人のもと。同い年くらいの子達が元気に遊び、一所懸命働く姿を見て自分もその中に身を投じてみたいと、日本を飛び出して、早14年が経ちました。

異文化の中で生活をしながら、日本人として働くこと。幸い東南アジア各国は親日であり、大変暮らしやすく、ほとんど不自由を感じません。

これまでにいくつかの職に携わって参りましたが、この10年ほどは海外から日本のお仕事をしており、昨今ではBPO（業務委託）、

SSC（業務集約）などで離れたところからお仕事をするのも世界的に多くなっています。

現在はWebExと言うウェブ会議のシステムを導入についてのお仕事をしており、場所にとられない働き方の提案をしています。こちらは出張費や時間の削減だけでなくBCP（災害時等の事業継続）にも役立つものになり、最近注目を浴びているものです。こちらにいるからこそ実感する部分も大きいのですが、日本を始め、世界の同僚とテレビ会議をしたり、日本のお客様とウェブ会議を通してお話ししたり、世界を身近に感じるようになりました。グローバル化する中で人と人のつながりを助けるのにお役立ちできたらと日々願っています。





ラヴニール代表
(l'avenir)

大杉 幸

過ぎてしまえばやっとなあつという間の？今年の4月でエステサロンを立ち上げて8年目に入ります。地元浜松の総合病院に臨床検査技師として8年間勤務した後、皮膚科・エステサロンでの経験を基に、2008年から『肌質・体質改善』を中心としたエステサロンをオープンしました。きっかけは自らの肌トラブルでした。女性なら誰もが気にするしみやしわ。それが嫌でエステサロンを探していました。悩みを親身になって聞いてくれ、安心して通えるところを探していたのですが、当時は怪しげなサロンが多く、それなら自分でオープンしよう！と思ったのがサロンオープンのきっかけです。

スキンケアの『いろは』は高校でも大学でも教わる事はなく、本やインターネット、テレビなどからの情報を頼りにケアされている方が多いのが現状です。そして、私たち日本人は綺麗好きという国民性も加わって、『ケアし過ぎ』からくる肌トラブルを抱えている方が少なくありません。日々のちよつとしたケアの違いが数年後のお肌を（良くも悪くも）大きく変えていきます。エステというと、すでにあるお肌のお悩みを改善していくイメージが強いかと思いますが、『予防』という考え方でお客様と関わらせていただいています。

今後はエステサロンという所がより安心して通っていたるように医療機関とのコラボレーションや、お客様の役にたてる情報発信ができるような活動も増やしていく予定です。

女性がキラキラ輝く街。今まで以上に浜松がそんな街になっていけるよう、今後も美容という分野で頑張っていきます。



特定非営利活動法人
WELnet さんだ
代表理事

小杉 崇浩

大学3年生になったばかりの頃、一人の男性と出会いました。その方は、筋ジストロフィーという病気で長期入院されており、自分の意思ではまったく動くことができない方でした。あるイベントが終わり、彼の病室で後片付けをしていると、ゆっくりと視線だけを僕の方に向けて、静かに口を開きました。「このまま病院で死にたくない...」27年間もの間病院で生活し続けてきた彼の、ずっと心に秘めていた思いでした。その日から約3か月後、彼は一人暮らしを始めました。身寄りもなく、地域との繋がりがほとんどなかった彼が街で一人暮らしをするというのは、本当に奇跡のようでした。しかし、望めば実現することを彼は証明してくれたのです。

その後、大学院在学中の25歳の時に、「生涯を通じて安心して暮らせる地域の実現」を目指してNPO法人WELnetさんだを立ち上げました。現在、ジョブコーチ、職業訓練、ヘルパー派遣、身障者デイスーパービス、ショートステイ、家庭学習支援、障害者水泳教室等の事業を行っています。

人が幸せになれるかどうかは、あきらめずに挑戦できるかどうかにあると思います。「挑戦する自由は誰にもある！」という言葉を胸に、今後も活動を続けていきたいと思っています。



東京消防庁神田消防署
消防司令

村山 隆之

西高在校時は陸上競技部に所属し、どちらかというと勉強よりも部活中心の高校生活だった思い出があります。指導者、同級生、先輩後輩に恵まれ、大会や合宿で各地に行かせていただきました。日頃の練習では、グラウンドの校舎寄りやりを投げており、野球部やサッカー部の皆さんには危険な思いをさせていたこともあったかもしれませんが、大学卒業後は陸上競技を通じて培った体力を生かして、現在は東京消防庁で勤務しています。

消防という職種は火災や救急はもとより、防災訓練や避難訓練などでも地域住民の方と密接につながる職種です。また、認知度は低いかもありませんが火災予防業務において建築関係の業種の方とも関わる事が頻りにあります。

地方公務員ですので所属する管内の業務が主ですが、緊急消防援助隊として東日本大震災や御嶽山の噴火などの他地域の被災に従事することもあります。

東京で勤務していますので、仕事で西高卒業生と繋がる機会はほとんどないかもしれませんが、しかし、関東に居住している卒業生も多くいらつしやると思っていますので、たまには関東で集まれたらいいなと思っています。他業種間のような情報交換を通じて、遠巻きながら西校を盛り上げていきましょう。

あの頃、私たちは確かに、ここにいた…

みんな元気かな？最近ではFacebookでみんなの今が見えるんでそれぞれ頑張ってるなあ☆と思ってるんだけど。だめ？

卒業式の時に「君らはまだサナギだ」って言ってたのを覚えています。

ポケベル全盛期。休み時間になると1階渡り廊下の公衆電話に列

30半ばを過ぎた今でもプライベートやビジネスで西高同級生(先輩・後輩)と繋がっています。

体育の授業のマラソンで近道バレ部はトップじゃないとぶち怒られたから、毎回ミヨについていくのに必死の地獄マラソンだったよ〜笑

サッカー部LOVE♥

夏休みなのにやたら登校していた。理由は「補修」。

A先生がスカートが短いとグラウンドを追いかけてきて走って逃げた

唐澤秀がどうしても同学年に見えない。

上履きのサンダルは冬場、「足入れ感」が固すぎる。

3年間部活に明け暮れた日々でした。

WE TOGETHER
OB OG
集まれ西高OB OG
良き思い出編♪

前川先生は良い先生だったなあ。

学ランの銀ボタンは実はコンパス針を用いての涙ぐましいカスタマイズでできている。新入生のデフォルトは黒着色が載ってるの。

マラソン大会頑張った、今も砂丘走ってるのかな？球技大会も頑張った、オウンゴールしたけど。

3年間の部活が思い出の大半です

校内履きのスリッパ。3年生くらいになるとボロボロになって美脚スリッパみたいになる

1年のとき、マラソンコースで小黒君が茶トラ猫ひろってきて、それをうちでかっていたなあ。16歳まで生きました

オフリーが美味しかった

テストの点数分布表、395番以降のメンツは、ほぼ言い当てられる。(アタクシ含め)

西山寮で部活の合宿で泊まった際、夜、こっそりプールに忍び込んで泳いだ

フィールドプレイヤーの背番号1は小杉が世界初。

前を歩きながらスリッパを脱いで置いていく先輩がいた

眺めが良い、銀色ボタンが少し誇らしかった、文武両道など

社会人になった今、西高の同級生とビジネスでも付き合うことができているのは私にとっての宝です。進学しない生徒は蚊帳の外という風潮が当時はあったように記憶しています。しかしながら、たまたま同級生の中に、進学をせず、自身の夢に向かって自らの道を進んだ面子が数名おられます。彼らの一部は、アスリートの世界でプロ選手として活躍したりしています。他にもプロミュージシャンや、独立起業しているメンバーが多いと感じます。彼らの意識の高さは、いつでも自分を刺激してくれ私の成長を促してくれます。とても貴重な出会いであったと今でも強く感じています。

U先生の授業で即わかりませんという口をあんぐりされチョークを落とされた…かしら。

今の浜松西高校を体感!
あの頃の私たちに再会

学校探検

& 西高あるある

西高あるある



みんなが、「あの坂はきつかった」と懐かしむ東坂

西坂は「フードセンター」かどうへの道

私のあるあるは、西高の坂を立ちこぎで一気にとぼりきるのが、運動部のポリマーみたいなところがあったな。例え、バレーボールやかごを持っていたとしても笑
今思えば恥ずかしいねえ。。。女捨ててたなあ(;><)

坂の下のフードセンターかとうまでスリッパのまま行った

誰もが一度はグラタンコロッケにハマる(西高の下の物菜屋)



販売はサンミーが一番人気。



オフリー特濃牛乳 4.7とのセットはまさにプレミアムな味わい。

購買のパンが品切れるの早すぎ。需要と供給バランスの見直しを申し立てるべきだった。

誰もがあんバターにハマる(購買のパン)



部活動も探検

目指せ新「フジヤマのとびうお」



誰もがまねするポーズ!?



部室



今でもよみがえる怒られた記憶(泣)



西高あるある

サッカー部入部初日に地獄坂ダッシュ、鴨江小マラソン、部室で説教のトリプル体験



文化祭

学校行事も探検



盛り上がってました! 体育大会

体育大会



はまホールでの開催は最後(泣)

コーラスコンクール



COME TOGETHER OB・OG

集え、西高OB・OG!!【部活OB・OG会 募集】

陸上競技部OB会



名称 陸上競技部OB会
担当者 鈴木 學(高22回卒)
連絡先 TEL 053-456-7898

【活動内容】
 毎年、現役生へ活躍を願ってタオルを贈っています。また、現役生徒の支援や、年1回6月に総会・親睦会を開催しています。

【OB・OGへのメッセージ】
 より多くの陸上部OBに、この会のことを知ってもらい、総会・親睦会へ足を運んでもらいたいです。現役陸上部の活動をみんなでサポートしていきましょう。

西高柔道部OB会



名称 西高柔道部OB会
事務局 宮崎 典彦(高31回卒)
連絡先 TEL 053-592-0731

【活動内容】
 浜松西高柔道部の支援及び同部OBの交流と親睦。現役生の全国大会出場応援も行いました。

【OB・OGへのメッセージ】
 毎年1月2日、西高柔道場にて稽古初めと現役生とOB会員との試合を行っています。会員皆様のご参加をお願いします。

浜松西高ボート部OB/OG会(非公式)



26年度のOB戦に出場(9/28日)天竜ボート場にて

名称 さなる湖会(浜松西高ボート部OB会)
担当者 鈴木 政晴(高40回卒)
連絡先 浜松西高中等部教諭 静岡県ボート協会副理事長
 masaharus1969@gmail.com

昨年度、創部40年を迎えた西高ボート部は、ここ7年間で春の全国選抜大会に5回、夏のインターハイに3回出場しています。中等部ができた8年前に部員が2人まで減り、存続が危ぶまれた時期もありました。大会に出場しても10年以上経過した古く重い艇ではなかなか勝つことができず、OB/OG会として初めて新艇を寄贈しました。毎年元旦10:00に行われている伝統の「初漕ぎ」も健在で、30名近い卒業生が現役世代の激励に佐鳴湖を訪れます。OB/OG会では、会費を積み立てた新艇購入、インターハイへの激励金で支援するほか、9月の新人戦と重ねて行われるOB戦にも出場しています。

【卒業生へのメッセージ】
 元旦の「初漕ぎ」に来てください。また、新人戦の応援を兼ねて、OB戦にも出場しましょう!この秋は連覇が途切れました…。活動の詳細はホームページ、Facebookをご覧ください。

浜松西高水泳部OB会 泳翠会



名称 西高水泳部OB会 泳翠会
担当者 湊 健一(高42回)
連絡先 TEL 090-2610-6806
HP <http://www.7b.biglobe.ne.jp/~esk/>

【活動内容】
 現役生の応援を目的とし、支援金や激励品の贈呈を行い、年に一度、総会を開催し親睦を深めています。

【OB・OGへのメッセージ】
 古橋広之進氏の意志を受け継ぎ、より強力に現役生を応援するため、是非皆さんご参加ください。

浜西弦友会 弓道部を東海地区NO1に、浜西弦友会に入会を



名称 浜西弦友会
担当者 小田木基行(高22回)
連絡先 TEL 090-7694-6257(河村)

【活動内容】
 現役弓道部の支援と会員相互の親睦研鑽が目的で、会員は10回卒の瀧美憲一先輩(現在も現役で弓道教士6段)から47回卒まで58名です。女性会員も10名います。老朽化した「観的板」を贈呈したり、年末練習最終日に浜西弦友会杯の大会を開催しています。

【OB・OGへのメッセージ】
 我が弓道部には輝かしい歴史があります。昭和59年インターハイで全国制覇を勝ち取りました。当時主将を務めた池本浩貴(高37回卒)も弦友会幹事として活動しています。

浜松西高等学校サッカー一部OB会 サッカーは武器を持たない戦いで世界の共通語



名称 浜松西高等学校サッカー一部OB会
担当者 秋田 満彦(高25回卒)
連絡先 TEL 053-463-0681

【活動内容】
 高等部・中等部現役部員・浜西OB・フットサルOBチームにも支援しています。ブログも御覧ください。

【OB・OGへのメッセージ】
 1946年1月26日、二中蹴球クラブ創設、2年後創部70年を迎えます。毎年1月2日の初蹴りや北高との定期戦を継続しています。

浜松西高等学校バスケットボール部OG・OB会



名称 浜松西高等学校バスケットボール部OG・OB会
担当者 会長 吉田新吾(高31回卒)
連絡先 事務局 大村 明広(高44回卒)
 TEL 090-7910-1298

【活動内容】
 毎年1月2日、現役生との交流戦およびOB総会・新春の集いを実施、卒業生への記念品贈呈、現役生への支援(遠征費・強化費)等

【OB・OGへのメッセージ】
 我が部は創部60年以上を誇り、平成7年7月「創立50周年記念誌」を発行しております。

野球部OB会



名称 野球部OB会
担当者 田力 錦秀(高27回卒)
連絡先 TEL 090-2685-8868

【活動内容】
 日頃は、OB会への多大なるご支援ありがとうございます。野球部OB会は年間通じて現役のサポートとOB会員の親睦を深めています。

【OB・OGへのメッセージ】
 伝統ある野球部OB会員は780名を超えました。OB会員の皆様のおかげで、甲子園に行きましょう

高25回卒の皆様、還暦おめでとーうございませう。

祝還暦

この度はご還暦を迎えられ誠におめでとーうございませう。これからの益々のご活躍とご健勝を浜松西高同窓会一同、心よりお祈り申し上げます。



未来
将来を語れる
友仲間が
どんなにすま
すばらしいことか
ありがとう

吉澤 俊道

31
HR



谷野 純夫



（ありがたきかな 我が母校）

最近、少子化で経営再編を迫られた某予備校のキャッチフレーズは、「志望校が母校になる。」でした。仕事に教員を選んだので、「勤めた学校は、自分の母校になる。」と心に決めて働いてきました。私の母校は、高校だけでも4校になりました。もちろん、浜松西高では、高校時代と30年ぶりの

教員時代の2度にわたり、大変お世話になりました。

お世話になった方に、恩返しするのは当然のことです。母親は選べませんが、母校は選べますから、選んだ自分に責任が生じるとともに、孝行する義務も生じるのだと思います。私たち高25回卒業生も、還暦を迎え、そのような立場に立とうとしています。

「Ask not what your country can do for you — ask what you can do for your country.」は、ケネディー大統領の就任演説にある有名な言葉です。CountryをAlma mater（母校）に替えて、これから、そうありたいと思います。

32
HR



渥美 守弘



「こんにちは、こんにちは世界の国から」

こんなメロディに乗って、日本で初めての万国博覧会が開催された年に、私たちは、西高生になりました。全国で吹き荒れた学園紛争も下火となり、希望にあふれた高校生活がスタートしました。今でも思い出すことがあります。

それは、入学式当日、教室に集まった私たちの前で、担任の先生から、「君たちには、国立大学進学100人以上を目指してもらおう。そのためには、一年生の時からしっかりと勉強するように。」いきなりこんなことを言われました。この時は、とんでもない高校に入ってしまったと思いましたが、私自身部活を三年生まで続けながらも無事国立大学に進学することができました。

その後、大学卒業の時のオイルショック、バブル景気、そして崩壊といろいろありましたが、無事今まで来れたのは、西高生であったことの誇りと自信であると思っています。



高橋 健夫

た。その中の3年間は浜松西高時代です。

天野さんのノーベル賞は別格として、地元で暮らしていると何かの折に西高を意識させられる事があります。その都度誇らしく感じたりするのは、母校愛というより自分を肯定したいだけなのかもしれません。でも出身校を誇らしく思えるのは大変幸せな事です。先輩や後輩たちが長きにわたり築き上げた伝統のおかげですし、自分もその一員として楽しく高校時代を過ごせたからだと思います。それが「繋」なのでしょう。その時代にその年齢でしか味わえなかった様々な思い出は、ふとした時に呼び起こされ、いまだに胸を熱くしてくれます。



佐藤 宏人

浜松西高を卒業して四〇有余年。当時の学校生活でのシーンが今でも鮮やかに蘇ってくるのは、それだけ中身の濃い経験をしていたのだろう。そして還暦を迎えた今、高校時代に描いていたバラ色人生からは少しずつ乖離を

して、その時々自分に与えられた環境や、新たな人との出会いなどを現実として受け止め受け入れることで、ま

た別の人生が開けていき、そして今の自分が存在しているのだと思うと共に、「思えば遠くへ来たもんだ」という感情が湧いてくる。論語よれば60歳は、人の意見に対し何の疑惑も持たず素直に従える「耳順」の境地だと教える。しかし未だやりたいことがいっぱいあって人生これからだ！という思いが「層強くなったのも事実である。西高の文武両道・自由闊達な精神を社会に広め、それによって自分自身も成長していくことが重要であり、この精神があったからこそノーベル賞受賞にも繋がったと思う。

西高のさらなる発展を祈念します。西高万歳



河合 章

早いもので、3年間過ごした西高を、卒業して42年になり、高校時代を懐かしく思い出します。

御殿場に行ったフレッシユンキャンプ。野球の応援練習からはじまり富士登山からいろいろの催し、佐鳴湖へのマラソン大会。今では根上がり松のあたりもだいぶ変わってきました。あと歴史の加藤先生が、授業中シャッソンを歌われ、授業が進まなかったのもひとつの勉強で懐かしく感じます。

さて、高校時代、街に行くとき皆よく言ったのですが、今は、イオンとかがあり街に行くとは、あまり言わなくなりました。

現在鍛冶町に店をかまえるものとして松菱跡、イトーヨーカ堂跡、遠鉄百貨店と共に、いい街とはどういう風にするか、いよいよか真剣に考え、実行しようとしています。

松菱跡の南側に15階建てのマンションが、建設予定です。私の育った街なかが、将来どういう街に変わっていくのか、わかりませんが、自分たちの孫たちが、街に行くこと、思える街づくりが、出来るよう還暦を迎えた今もこれからも、日々頑張っていきたいと思えます。



富永 秀実

〈高校在学時の思い出／還暦まで〉
卒業して40年余の長い月日が過ぎた。遙か昔になってしまった高校時代の思い出といえは、――。猛勉強をして優秀な成績を残したわけでもなく、部活動に全力を傾け目覚ましい活躍をしたのでもなく、少々強面の高校生で他校と張り合ったわけでもなく、ごくごく平凡な生徒であった。

しかしそんな中で、少し他の生徒と違っていたのは、春から秋の白シャツ以外の学生服である3年間、とにかく真冬であろうと何であろうと学生服の下はランニングという下着で、シャツやセーターを着ずにひたすら我慢して薄着で

過ごしていた。(実は中学からで、行為としてはかなり長い)大方の人は、何と馬鹿馬鹿しいことで何の意味があるかと思われ、に違いない。子ども心に、自分につまらないことだと思われようが、自分で決めたことを最後まで貫くことに意義があるのだと感じていた。今思えば、病气や怪我をしても何とか健康でいられるのも、あの頃やせ我慢をして身体を少し鍛えたことと潜在意識に記憶させている賜物かもしれない。

さて還暦を迎え、いよいよ人生の後半となる。60歳や65歳で高齢者との定義にはいささか抵抗があるが、たった1度の人(一人の子供もようやくもう少)で社会人になる。これからの人生、歳を重ねることは、価値があると思いたい。単に若さを失うことではなく、自身の質を高めることでありたいと思う。

38
HR

〈還暦に思う〉



鈴木 亮子

「ボン」という矢が的を射ぬくときの乾いた小気味よい音。昇降口の窓から見える袴姿の先輩。弓を引く姿が新鮮で弓道部に入りました。「あたりー」と大きな声をはり上げるのは気恥ずかしいものでしたが、それ以上に体育館前のコンクリートの上でする正座のきつかったこと、足のしびれとの戦いに苦戦しました。弓道部には同期で六人

の女子が入部、女子が少なかった当時としては六人もの入部は異例のことだったとか。戦績はそれなりでしたが、部活の後はイケメン(?)先輩のうわさ話で盛り上がり楽しい部活でした。還暦をむかえ、過ぎゆく時が加速していくようです。振り返ると、いい友人に恵まれたものだと思います。人生いろいろありました。場面場面でいい友がいて今のわたしがいます。幸いにして今も浜松で生活し、西高の仲間とも会う機会に恵まれています。高校時代の裏話を肴に共通の話題で盛り上がり、仕事も忘れてのおしゃべりはほっとする時間です。

還暦での再会を機会に、これからも楽しいひとときを二縮しましょう。

37
HR



長谷川 尚也

〈還暦にあたり〉

今回、還暦を迎えることになり、今まで考えたこともなかった自分の人生について自分なりに評価してみることにした。小中学生の頃、高校大学の青春時代、これまでも一番長い社会人としての時期について、また、独身時代、結婚生活、親として、「還暦」を人生の折り返し点と考え自己評価は、大

満足?している。反省することは沢山あるが後悔はしていない。孔子の有名な言葉に「吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順。七十にして心の欲する所に従つて矩をこえず。」というのがある。五十になつて天命をわきまえて、六十になつて人の言葉が素直に聞かれるようになり、七十になつて思うままにふるまつても道を外すことがないようなそんな生涯を送ることができるようこれからも精進していきたいと考えている。

大好きな言葉「身の丈」「身の程」をわきまえて、後悔しない人生を送ってきたい。

39
HR



藤井 達也

〈42年後——還暦を迎えて〉

我々が卒業した昭和48年3月から現在までに42年もの年月が流れた。その間に西高も大きく変わり、今は随分と上品でスマートな学校になったようだ。では、42年後の私はどう変わっただろう。

まず身体面。体力が低下し疲労からの回復力も格段に衰えた。近視が進み、さらに最近では老眼の進行が著しい。写真をご覧いただければ一目瞭然、髪の量が激減した(髪が細くなつた?)。高校時代に床屋泣かせと言われたことが嘘のような変わりようである。唯一身長は変わらないが体重は20kgも増えた。

次に中身はどうか。記憶力がめつつき落ちて、特にここ数年人の名前が覚えられない。知識量は高校時代と大して変わっていない(忘れる量も多いので)。しかし、学び方が身に付いたと思う。そして人を外見だけで判断することが少なくなった。これらは嬉しい変化である。

最後に生活面。所帯持ちになつた。高校時代には考えもしない教育関係の仕事に就いている。最近特に感ずるところだが、西高出身の先輩や後輩との仕事での付き合いが増えている。西高出身者は皆とても世話好きである。有難い限り。

今年還暦を迎えて改めて思うことは、自分が西高出身で本当に良かったなあということである。これまでの人生において西高卒で得をした経験は数多くあるが損をしたなどということは何度もない。それは多くの優秀な先輩方や後輩たちの頑張りがあつて、西高というブランドの価値を上げてくれたお蔭に違いない。そして昨年はさらにその西高林を急騰させる一大快挙があつた。後輩卒業生のノール賞受賞である。天野氏に乾杯!!!



繋

つ な が る

tsunagaru

Staff [高47回卒]

Representative [代表]

村松 貴通

Vice-representative [副代表]

疋田 通丈、安田 恵、伊藤 芳典

Secretariat [事務局]

疋田 通丈、安田 恵、石川麻友子

Planning section [企画部]

伊藤 芳典、杉田 策弘、鈴木 亮次
荒田 育男

Advertising section [広告部]

田形 誠、中村 竜太郎、杉田 策弘
疋田 通丈、安田 恵、鈴木 岳人
伊藤 芳典、小出 拓治、山下 大輔
牧田 晃一郎、天野 寛志、伊藤 茜
伊藤 嘉浩、岩澤 加奈子、鈴木 一紀
中村 友和、伊藤 暢洋、中村 俊幸
小杉 哲康、大杉 幸

Ticket [チケット]

牧田 晃一郎、小出 拓治、鈴木 岳人
高 哲也

Accounting [会計]

島 章悟

Memorial magazine section [記念誌部]

小杉 哲康、小田木 俊郎、室内 良隆
榎本 貴文、深見 俊彦

※順不同

Direction [制作進行管理]

(株)中日アド企画(担当 高47回卒 小杉 哲康)

Design [デザイン]

(有)彩

Writer [コピーライター]

メ切三味(担当 高49回卒 野寄 晴義)

Print [印刷]

(株)中部印刷(高28回卒 山下 慶一郎)

Issue [発行]

浜松西高等学校 第47回卒同窓会幹事会

We are all connected

見えない糸は、確かに存在している。

それは無数にうごめく触手のように、

長く、強く、世界中をまたにかけ、

芸術なる蜘蛛の住処のように張り巡らされている。

やはり、私たちは繋がっている。

その糸は、90年もの歳月をかけ、

粛々と継承されてきた「西高生であること」の造詣なのだ。

世代を超えて熟成し続ける、親和と誇りなのだ。

今宵、あなたも感じることができるだろう。

繋がりの形成の一端には、

間違いなく「私が存在している」ということを。

怒涛なる母校・浜松西高の歴史と発展は

「私が担っていく」ということを。

本記念誌の企画・取材・制作にあたって、多数の同窓生、その他関係諸氏のご協力を賜りました。
この場を借りてお礼を申し上げます。

NEXT 2016.1.2

[新春の集い 幹事]のバトンを
高48回卒の皆様につなぎます。

